

漢字が来た道

大陸から半島を経由して列島へ

Spread of Chinese Characters :
From China to the Japanese Islands through the Korean Peninsula
INUKAI Takashi

犬飼 隆

1. 日本に漢字がもたらされた

現代に使われている世界の文字の起源は遡れば2つだけである。古代エジプトのヒエログリフは、表語文字であったが、語形を指定する書記形態から一部の字体が表音用法で使われるようになり、古代のフェニキアには表音文字として伝わった。その音節文字が古代ギリシャに伝えられて子音と母音とにそれぞれ専用の字体をもつ表音文字に改造された。それがローマ字のもととなった。そのほか、キリル文字、インド文字、チベット文字、モンゴル文字なども起源はヒエログリフである。もう1つの起源は漢字である。漢字は表語文字として今日もアジアで広く使われている。日本のかなや韓国・朝鮮のハングルは漢字を改造した表音文字である。そのほかに古代には西夏やベトナムなどいくつかの民族・国家が漢字にならって自国語用の表語文字をもったが、今日では放棄されている。なお、古代にはアッシリアの楔形文字や南アメリカの絵文字など、ヒエログリフと漢字以外の文字も存在したが今日では使われていない。

日本語は文字を持たない言語であり、中国から漢字を取り入れた。取り入れた当初は、漢字が言語情報をあらわすという認識はなかったであろう。西暦14年に鑄造された貨泉が弥生時代の土器に伴って出土しているが、そこに刻まれた図形が文字として認識されたか否か疑問である。三重県の大城遺跡から出土した2世紀前半の土器に刻まれた図形を「奉」という字によむ説があるが疑問が残る。同じく三重県の貝蔵遺跡から出土した3世紀の土器の墨書「田」は字であろうが、言語記号として認識されていたか不明であり、一種のデザインとして認識されていた可能性も考えなくてはならない。

漢字で日本の事柄を記録する、言い換えれば、漢字を言語記号として使った最古の例は、今のところ、5世紀の金石文である。和歌山県の隅田八幡宮所蔵の人物画像鏡銘、千葉県の新井古墳から出土した鉄剣銘、熊本県の江田船山古墳から出土した大刀銘、埼玉県の新井古墳から出土した鉄剣銘などである。これらは、日本列島における政治勢力の勃興において作成されたものであり、いずれも漢文で呪的・祝祭的な内容のことがらをつづっている。そのなかに日本語の固有名詞が漢字の仮借の方法で書かれている場合がある。

これらの漢字の用法は、政権のあり方にかかわる諸様式、諸技術とともに、朝鮮半島との交流のなかで伝えられた。かつては、日本列島における漢字の使用を中国中原におけるありようと比較して考えてきたが、近時、7世紀までは朝鮮半島において一度咀嚼されたものが日本列島へ伝えられるのが主流であったことが明らかになってきている。そしてそれは、中国周辺の諸民族・諸国家における漢字受容のあり方として東アジア全体の動向のなかに位置付けられる現象である。たとえば中国中原で金属の重量単位をあらわす「鎰」を日本列島ではかぎにあてる。これは日本列島独自の用法でなく、古代の朝鮮半島と共通性をもち、さらに契丹族の国家であった遼にも跡を残している。

ここに5～7世紀までに朝鮮半島から日本列島へ漢字の用法がもたらされた経緯の一端を記述する。記述の末尾では8世紀に入って遣唐使が再開されると中国中原の用法が直接にもたらされたことを述べる。

2. 5世紀、日本で日本の事柄を漢字で書きはじめた

埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文は下記のとおりである（便宜上、異体字を簡略化して示す。以下同じ）。冒頭の「辛亥年」は西暦471年とするのが通説である。

（表）辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埵其兄多加利足尼其兄名弓已加利獲居其兄名多加披次獲居其兄名多沙鬼獲居其兄名半弓比

（裏）其兄名加差披余其兄名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根源也

この漢字の用法には朝鮮半島との交流を示す徴証がいくつも含まれている。まず上記の釈文に波線で示した「鹵」の異体字である。この字形は江田船山古墳の大刀銘も一致するほか、7世紀の扶餘陵山里寺址から出土した百済の木簡「漢城下部對德疎加鹵」（『韓国木簡字典』国立加耶文化財研究所2011の木簡番号13）にもみられる。⁽¹⁾このほかにも同様の現象がある。たとえば、例示を省略するが、さんずい偏を左上に小さく寄せた字形が古代の朝鮮半島の木簡にしばしば見られる。これも、徳島県の観音寺遺跡から出土した「難波津の歌」木簡のように、8世紀初頭までの日本の出土資料にも見られるところである。その源流は中国中原の六朝の書風と推測されるが、大陸で廃れた後に半島と列島にあらわれる点が興味深い。

次に「七月中」の「中」字であるが、7月の1ヶ月間ではなく「七月に」この文章が書かれたことをあらわしている。漢字「中」が時間をあらわすとき、中国中原では「その期間」をさす。しかし、古代の朝鮮半島には、下記のように、この鉄剣銘における用法と同じく「そのとき」をあらわした用例がある。⁽²⁾

「五月中高麗大王祖王令還新羅寐錦世々爲願如兄如弟…」建興四年中原高句麗碑（四七五または四一五）

「己亥中墓像人名…」順興邑内里壁画古墳墨書（五七九）

中国中原の規範からみて訛りとなるこの現象は、おそらく、中国語と朝鮮半島の言語との性格の相違から生じたものである。中国語は事件を1つの概念としてとらえることを好み、韓国語・朝鮮語は事件を時間的な推移としてとらえることを好む。同じ「七月中」であっても、中国語の発想ではある幅をもつ時間が想起され、韓国語・朝鮮語の発想では…6月、7月、8月…という時間の流れのなかの一点が想起されるのである。この性格は古代にも同じだったであろう。そして、韓国語・朝鮮語と日本語との文法的な類似もまた、古代にも同じだったであろう。

次に語を書きあらわす方法が共通している現象の1つを取り上げて述べる⁽³⁾。上記の釈文に傍線で示した「獲居」「獲加」は万葉仮名の用法の分類で「連合仮名」と呼ばれる書記形態である。「獲」は現代の音よみでカクとよまれるように、古代の中国中原では音よみが子音kで終わっていた。「獲居」「獲加」はそれぞれ日本語のワク、ワカという発音をあらわしている。カク、カカでないのは、古い時代の音よみを反映するもので、「和」を漢音ではカと音よみするが呉音ではワと音よみするのと同じである。「獲」と「和」は古い時代に中国中原で同じ子音で始まる音よみであった。さて、「獲居」「獲加」は、獲 wak+居 kjə / 加 ka = wake / waka のように「獲」の末尾のkと次の字の頭の子音のkとが同じである。日本語の音韻構造は子音と母音が1個ずつ交互にならぶ特徴をもつ。2つのkを重ねて1つに扱うことによって、漢字の音よみの子音母音の配置と日本語の発音のそれとの矛盾を解消しているのである。【k+k>k】のようにして2字全体で日本語の2音節または3音節を書きあらわすので「連合仮名」と呼ぶ。「連合仮名」は、たとえば「甘茂」と書いて「甘」の末尾のmに「茂」の頭のmを重ねてカモにあて、「信濃」と書いて「信」の末尾のnに「濃」の頭のnを重ねてシナノにあてるなど、固有名詞に多くの用例がある。

古代の朝鮮半島にも、これと共通する性格の書記方法が見出される。韓国咸安市の城山山城から出土した6世紀の木簡に「伊骨利」という村名がいくつかある。「伊」はi「骨」はkur「利」はriのような音よみによる表音用法であり、固有名詞の発音はikuriのように再現できる。この「骨」の末尾のrと「利」の頭のrとが【r+r>r】のように日本の「連合仮名」と同じ仕組みになっている。

ただし同じ村名を「伊骨」と書いた例もある。古代の新羅語の発音が母音で終わるikuriであったなら、「骨」の末尾のrに母音iを補ってよむ仕組みということになる。これは、上記の釈文に破線で示した「足尼」の書記方法と一致する。「足」は中国中原の音よみでは子音kで終わる。その後に母音uを補ってよみ、1字をスクの2音節にあてて、「足尼」2字で日本語スクネの3音節を書きあらわす仕組みである。この「足」のような用法の万葉仮名を「二合仮名」と呼ぶ。この類例も、たとえば子音tで終わる「秩」の後に母音を補って「秩父」をチチブにあてるように、日本列島に数多い。

また、ここで対象にしている新羅語の村名が子音で終わるikurであったなら、「伊骨」は発音のとおり書いた形態ということになる。そしてその場合、「伊骨利」の「利」は語形末尾のrを明示するために書き添えたと解釈できる。というのは、8世紀以降の朝鮮半島の書記方法に「義字末音添記」と呼ばれるものがある。たとえば13世紀に書かれた『三国遺事』所収の「慕竹旨郎歌」に「道尸」という書記形態がある。「道」を高麗語でよめば発音の末尾が子音rで終わるが、そのrを表音用法の「尸」（この字がrの表音価値をもつ理由については韓国語学で議論があるが、事実として頻用されている）を添えて明示し、そのほかのよみ方を排除する方法である。

この方法が城山山城木簡の書かれた時代にすでに存在した可能性がある（以下、国際学術会議 Sinographic Cosmopolis Evidence from mokkan to the 20th century 2013.6.16-18, Tokyo の席上、権仁翰氏から教示された知見による）。城山山城木簡に人名「文戸」がいくつかあらわれる。たとえば墨痕の明瞭な『韓国木簡字典』の木簡番号148の釈文は「及伐城文戸伊稗一石」である。この「伊」は人名の接尾辞と解釈でき、「文」が固有語の人名であるなら、その語形は gir のように推定され、「戸」はその末尾の子音 r を示す添記であった可能性をもつ。この知見に従えば、6世紀の同一資料に書かれた固有語の書記形態に、表語用法の字によってあらわした固有語の末音と、表音用法の字によってあらわした固有語の末音との、両方に、表音用法の字を書き添えて語形を明示した例が存在したことになる。言い換えると、5, 6世紀の朝鮮半島に、固有語の発音を漢字で書きあらわす際に、字の音よみまたは固有語よみであらわされる語形を明示するために、語形末尾の子音をあらわす字を書き添える方法があったことになる。これが日本列島へ伝えられたのであろう。

上記に述べたところを書記方法の原理として共通点と相違点を整理する。古代の朝鮮半島の固有語の語形が閉音節の場合は1字書き加えると「末音」に対する「添記」になるが、日本語は古代から常に開音節だったので固有語末尾に1字書き加えると語形が1音節の増加になる。それが「連合仮名」である。また、古代の朝鮮半島の固有語の語形が開音節の場合に、漢字の表音用法で語形末尾の子音のみ示し母音は補ってよむ書記形態が存在した可能性がある。それを日本語に適用すると「二合仮名」になる。

文字の歴史においては、表語文字が表音文字に改造される過程で、これと本質的に同じ現象が普遍的に起きる。古代エジプトのヒエログリフにも表語文字を仮借の方法で表音文字として使う書記形態がある。そのときの字の配置は「義字末音添記」と同じ原理によっている⁽⁴⁾。その際の文字の表音価値と書かれる言語との性格に従って、それぞれの言語に即した表音文字の体系が成り立つのである。その詳細を考察することが、比較文字学の課題となる。日本と韓国の研究者にとって良き研究対象であらう。

なお8世紀以後の展望を付言する。朝鮮半島では「添記」が表語用法の字に対して表音用法の字を書き添える仕組みに整理されて、「義字末音添記」や固有語よみする漢字に添える「吐」になる。日本列島では「連合仮名」は廃れ（ただし、さらに後に送り仮名の原理として復活）、「二合仮名」は漢字1字を2音節でよむ漢字音として固定化する。

ここに論述した稲荷山古墳鉄剣銘の日本語書記方法と朝鮮半島の固有名詞書記方法との共通性は、漢字の用法が諸々の技術・知識の一環として主に百済から伝えられた経緯を示す徴証と解釈できる。『古事記』と『日本書紀』とに一致して、応神天皇の世に百済王が派遣した和迺（王仁）が文首の祖になったとある。『古事記』の記述に応神天皇の世にはまだ存在しない『千字文』を携えたことから、この記事には虚構が含まれているとわかるが、漢字文化が日本列島へ渡来した事情を伝える逸話ではある。高句麗、新羅と対抗するために、百済が同盟国に先進技術・知識を提供したのである。なお、和迺を『日本書紀』が王仁と書く理由について付言する。「王」は、その漢学が中国中原の正統に由来するものであったことを示し、「仁」は、その漢字としての意味用法を生かしつつ、「王」の末尾の ng に対して類音の n によって「末音添記」したものであろう。

3. 6世紀末から7世紀前半、中国と直接の交流を意識した

欽明天皇の31年(570)に高句麗から国書を携えた使者が越に漂着したと『日本書紀』にある。百済と、高句麗・新羅との緊張関係が高まっていた時期である。天皇の崩御もあって使者は山城の相楽館にとどめおかれた。敏達天皇の元年、その国書を天皇が史たちに読解を命じたところ、3日をかけて誰も読めなかったが、ただ1人、王辰尔が読めた。「烏羽之状」として知られる故事である。

王辰尔は欽明天皇の14年に蘇我稲目が献じた人材である。船史の姓を賜り、船連の祖となった。おそらく、水運に関する専門技術をもつ人材として百済から派遣されたのであろう。対新羅・高句麗戦争に備えて派遣された軍事顧問という解釈もある⁽⁵⁾。ここで考察する問題に関しては、黄海を隔てて中国との交流が深かった百済の、水運関係者という点に注目したい。『日本書紀』には王辰尔が烏の羽に書かれた墨を湯気で布に移して読んだと書かれているが、実態は5世紀から伝えられてきた史たちの漢学では当代の中国語で書かれた漢文が読めなかったと解釈する⁽⁶⁾。

この経験は朝廷に中国と交流して最新の文化を取り入れる必要を意識させた。『隋書倭国伝』には開皇20年(600)に倭王が使いを遣わして「闕に詣る」とある。推古天皇の8年にあたるが、『日本書紀』には遣隋使を送ったという記述がない。これを、送ったが隋は国使として受け入れず、事情を聴取して引き取らせたと解釈する(前掲拙稿)。推古天皇の15年(607)に改めて小野妹子らを送り、『隋書倭国伝』に大業3年に同じ倭王が使いを遣わして「朝貢す」とあるように、国使として承認された。なおも、周知のとおり、煬帝が国書の文言を不快とし、帰国した小野妹子が中国の返書を百済で失ったと奇妙な申し開きをするという悶着があったが、裴世清が返使として遣わされて国交は成立した。

その後、朝廷は遣唐使を派遣して中国中原の文化の直輸入に努めた。そのなかで新しい漢学を身に付ける知識人が育った。『日本書紀』の記事には境(坂合)部連一族の外交における活躍が目立つ。なかでも石積(磐積)は、孝徳天皇の白雉4年(653)に学生として遣唐使に加わり、白村江敗戦(663)後の天智天皇4年(665)に唐から来た劉徳高らの送使にも参加し、翌々年に護送されて帰国した。その経歴のなかで、漢学を学び、当代の中国語による会話や作文を習得したのであろう。『日本書紀』の天武天皇11年(682)の記事に境部連石積等に『新字』1部44巻を「肇めて造らしむ」とある。次の節に述べるように、唐との国交が断絶するなかで、知識をもつ者に最新の中国語の手引きを編纂させようとした政策であったと解釈できる。

4. 7世紀後半、朝鮮半島から間接的に漢字文化を学んだ

しかし、白村江敗戦後、遣唐使を送って漢字文化を取り入れる途がたたれたので、新しい知識は、滅びた百済からの亡命者と、半島統一後に唐の属国扱いをきらって日本と同盟した新羅との国交によって学んだ⁽⁷⁾。従来は、白村江前後に連れてこられた2人の中国人、続守言と薩弘恪が注目されてきたが、彼らは大和朝廷が組織したbrain集団の中の貴重なnative speakerであったにすぎない。今日の大学におけるスピーキング担当のnative外国人教員の位置が想起できるであろう。

天智天皇の10年(671)に鬼室集斯が学職頭に任命されたと『日本書紀』に書かれている。日本における大学のはじまりである。教授陣には、兵法に達率谷那晋首ら、薬学には鬼室集信ら、五経

には許率母らなど、百済から亡命した貴族層が任命された。高級官僚の養成が百済人によってなされたことになる。『日本書紀』の持統天皇の5年(691)の記事によれば、統守言と薩弘恪が音博士を務めていたとき、書博士は百済の末士善信が務めていたことがわかる。彼らは近江に、はじめ300人、後に700人の集落をなして居住した。7世紀後半において日本のシリコンバレーとして機能していたと想像できる。

新羅への学僧派遣を跡付ける記事も数多い。たとえば持統天皇の3年(689)には、上記の統守言と薩弘恪に対する報償の記事と並んで、学問僧の明聡、観智等が「新羅の師友に送らむが為の綿」を賜ったとある。明聡、観智は、留学して教えを受けたり世話になったわけである。学問僧として留学した人材は、朝廷の意向で還俗させられて学術方面に用いられるときがあった。これら刑罰の意味を全くもたない還俗例は、遣唐使が途絶えている時期に新羅を通じて大陸文化を摂取し学芸部門の陣容を整えるために行われたと推論されている⁽⁸⁾。たとえば『続日本紀』の文武天皇の4年(700)の記事には、僧通徳と恵俊を「その藝を用るむが為に」還俗させて、通徳を陽侯史久爾曾とし、恵俊を吉宜としたとある。陽侯氏は文筆の方面で活動著しく、吉田連宜は万葉歌人としても名高い名匠となる。『懷風藻』(天平勝宝3年(751)序)に3首が収録されている大学頭山田史三方も、かつて学僧として新羅に留学したと書かれている。

この事情から起因して、7世紀後半に日本列島へ摂取された漢字の用法は、実のところ、最新の知見とは言えないところがあった。これについて東アジア全体を見渡しながらいししい検証を要するが、ここでは字音を例にとってその一端を述べる。

中国の漢字音は歴史的に変化して6世紀から中古音の時代に入っていた。それに従って日本の漢字の音読みも変化した。たとえば「経」は呉音では「經典」のようにキャウと音よみするが、漢音では「經濟」のようにケイと音よみする。後者が中古音の反映である。7世紀末に、もし中国中原との交流が継続的で量的にも大きかったなら、正統的な漢字の音読みとして、漢字音全体が漢音に置き換えられたかもしれない。しかし、上記の実情により、当時の日本漢字音は、古くから蓄積されてきたものと新しく輸入されたものとが混在している状態であった。比較的古い呉音ばかりか、中国中原の上古音(理論上では紀元前の時代の漢字音)の跡を残す古韓音が8世紀に入ってもなお行われていた⁽⁹⁾。

日本最初の正史として、天武天皇の10年(681)に編纂が開始された『日本書紀』は、漢字の最新の用法を取り入れて書かれた。漢文の文体、当時の現代中国語であった中古音の採用をめざしたのである。結局、全30巻に一貫した漢字の用法の統一は実現しなかったが、全体の半分ほどの巻々(森博達の言うa群)は万葉仮名を漢音によって用いている。しかしa群のなかにも漢音の体系に合致しない用例が混在する。たとえば皇極紀の歌謡109番に「野父播羅やふはら(藪原)」⁽¹⁰⁾、武烈紀の歌謡89番に「於謀賦おもふ(思ふ)」の例がある。「父」をブの万葉仮名、「謀」をモの万葉仮名として使っているのは漢音に合致しない。「父母」を呉音でよめばブモ、漢音でよめばフボであるように、「父」などの頭子音は中国中原でbからfに変化し、「謀」などの頭子音はmから⁽¹⁰⁾mbに変化した。

この現象は、養老4年(720)まで40年にわたった編纂の過程で何らかの事情で不統一が生じたとして説明することもできようが、漢音のなかに新旧の層を想定するのが妥当であろう。漢音を古中新の3層に分類し、古層をa群の背景に推定する説がある⁽¹⁰⁾。日本に輸入された「中古音」が百済人や

新羅人が習得した漢字音であったとすれば、当時の中国中原の状態に比較して time-lag があった可能性は十分に考えられる。また、続守言と薩弘恪の中国語はどのようなものだったであろうか(薩弘恪は大宝律令の作成に参加しているから知識人ではあった)。言語の変化は日にちと範囲を定めて制度を一斉に施行するような進み方をしない。江戸時代末期に漂流日本人の言語に即してアメリカやロシアでつくられた日本語辞書が方言を反映したものであったことが想起される。

5. 8 世紀、中国からの直輸入につとめた

藤原京が完成し大宝律令を制定して、朝廷は久々の遣唐使を大宝元年(701)に任命した。東アジア国際社会に復帰する意気込みであったろう。大宝2年に出発したこの遣唐使について『続日本紀』は正使粟田真人の人柄が彼の地でほめられたこと以外に何も記述していないが、行ってみると、唐は則天武后の周になっており、国際情勢に立ち遅れていることを痛感したらしい。朝廷はその対応策をとる。たとえば藤原京からわずか16年で平城京へ遷都した事情は諸説あるが、中国中原の律令に定める都の規格に合っていないと判明したことが1つの大きな理由だったであろう。以後、朝廷は霊龜2年(716)、天平4年(732)と継続して遣唐使を送り、最新かつ正統の中国文化を摂取しようと努める。霊龜2年度には吉備真備や玄昉が参加した。阿倍仲麻呂も帰国できたなら国を支える人材の一人になったであろう。天平4年度に唐へ渡った栄叡と普照は鑑真を招いた。授戒のできる人材の招待は、僧という身分の位置付けが、〈還俗して他の方面で活躍できる〉総合的な知識人から〈還俗が特権剥奪となる〉仏教組織の一員に変わることを意味する。

以後、直輸入の漢字文化による在来のその上書きが次第に進行した。たとえば、いわゆる「前白」様式は上申文書に藤原京の時代には頻用されていたが、平城京の時代に入ると廃れた。新羅から学んだ様式を中国中原のそれに改めたのである。⁽¹¹⁾ 律令の文書様式「牒」の字体には、旁の上が「世」でなく「云」の異体字がある。煬帝の諱李世民的「世」を避けるためにつくられて西暦657年から使われた字形である。中国中原ではこの字形を専用したが、7、8世紀の日本では区別なく両用していた。一例をあげれば滋賀県の西河原湯ノ部遺跡から出土した丙子年(676)の木簡に冒頭に「牒」、末尾の「也」の前に旁の上が「云」の異体字が書かれている。しかし、平安時代に至ると避諱の字形に一本化される。⁽¹²⁾ このようにして、現代に行われている漢字の用法は、8世紀後半以降に形成されたすがたを受け継ぐ側面が大きい。天平7年(735)に唐から来て清村宿禰の姓を賜り大学頭を務めた袁晋卿の中国語は、先にふれた続守言と薩弘恪のそれと大きく違っていた。その詳細について論ずるには稿を改めなくてはならない。

7世紀までの漢字文化は、消去されるのではなく伝統文化に組み込まれていった。聖武天皇の時代に、中国からの外来文化に対して、7世紀までに醸されていた、もともと朝鮮半島渡来または経由の要素を含む文化を、在来と位置付けたのである。これをもって朝鮮半島から伝えられた要素は在来の要素のなかに含まれることになった。例をあげるなら、高句麗でつくられたといわれる「椋」は「倉」「庫」との併用を経て固有名詞「小椋」などに定着していく。第1節でふれたかぎをあらわす字体は、『万葉集』などでは「鑑」、『日本書紀』や律令条文は「鑰」というように位相的に使い分けられ、この「鑑」の用法は中世まで保持される。⁽¹³⁾

日本列島に固有の文化と考えられがちな和歌もまた、根源は日本列島に在来の歌謡であろうが、

朝鮮半島を経由した漢学の影響をうけて今に見るかたちが成り立ったものである。『古今和歌集』の仮名序に「難波津の歌」は仁徳天皇の即位を促すために先にふれた百済からの渡来人と述がつくつたと書かれている。説話であるが、和歌という様式の起源に関して示唆的である。外来の漢詩に対する在来の和歌という認識は、8世紀に入ってからつくられたのである。『万葉集』の編纂は、その動向のなかで行われた。そのことについても別稿を用意している。

註

- (1)——拙稿「漢字と国家形成」『HUMAN』平凡社 2013.5の写真参照。
- (2)——国立歴史民俗博物館『古代日本文字のある風景』朝日新聞社 2002より引用。
- (3)——詳細は拙稿「古代日朝における言語表記」国立歴史民俗博物館・平川南編『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店 2014のp132～144参照。
- (4)——西田龍雄編『講座言語第5巻世界の文字』大修館書店 1981など参照。
- (5)——田中史生「王辰爾 王権と王権を結ぶ渡来人」『古代の人物①日出る国の誕生』清文堂出版 2009。
- (6)——拙稿「「烏羽之状」事件の背景」『愛知県立大学文学部論集 国文学科篇』57号 2009.3。
- (7)——拙稿「天平期の学制改変と漢字文化を支えた人材」『萬葉語文研究』第6集、和泉書院 2011.3。
- (8)——関見「遣新羅使の文化史的意義」『山梨大学学芸学部研究報告』六 1955。
- (9)——拙著『木簡による日本語書記史』笠間書院 2011第一章 p45～52参照。
- (10)——沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院 1997のp43～49。分類の基準は「上声全濁字の去声化」の比率によっている。
- (11)——李成市「韓国出土の木簡について」『木簡研究』第一九号 1997など参照。
- (12)——市大樹『飛鳥藤原本簡の研究』塙書房 2010のp514参照。市の見解は川端新の説によっている。
- (13)——方国花「古代東アジア各国における「カギ」の漢字表記（上）（下）」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化専攻篇）』第3、4号 2012～3参照。

（愛知県立大学日本文化学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2014年1月7日受付，2014年5月26日審査終了）